

飯塚 耕一郎氏 講演

「母を取り戻す ～全拉致被害者 即時一括帰国に向けて～」

家族会の飯塚耕一郎と申します。田口八重子の長男でございます。

本日、パーティーがございますので、マスクを取って、お話をさせていただきたいと思います。

はい、改めまして田口八重子の長男でございます、飯塚耕一郎です。

本日は、年末のお忙しい中にもかかわらず、皆様お集まりいただきまして、ありがとうございます。

私の方から私の母である田口八重子に関するお話を中心に、これまでどういう経緯で、父親である飯塚繁雄とともに歩いてきたのか、また、その我々家族として今どういう状況にあるのか、今後どういう形で日本政府や北朝鮮に対して動いていくべきなのかというところを、改めてお話をさせていただければなというふうに思っております。

それでは始めさせていただきたいと思います。

まずこちらの方の写真です。

あまり報道等には出てないんですけども、私と私の姉と、あと八重子さんを含むその3人が写っている、唯一残っている写真です。

以前、八重子さんと3人で、私が1歳と、姉が2歳の頃ですけども暮らしていた頃ですね、そこからいなくなった後で、代表である飯塚繁雄の所に引き取られたんですけども、そのときに引っ越し等のごたごたによって、写真が、家族写真というのがほぼなくなってしまって、唯一の写真になっております。報道等で見ると八重子さんの表情と違って、だいぶその母親として朗らかでやさしい雰囲気が出ているものになっています。

もともとですね、私は1歳のときに代表の方に引き取られたので、そもそも田口八重子さんという存在を、ちっちゃい頃、子どもの頃とか、あと中学生、高校生とかっていうところでは、全く知らなかった状況なんですね。

そして、就職した時にですね、海外研修がございまして、海外研修のためにパスポートが必要になってくるという形で、そこで戸籍謄本を生まれて初めて取ったんですけども、その自分の母親の欄のところに【田口八重子】という全く私が知らない女性の名前が書かれていましたので、ちょっと衝撃を受けてですね、そのままの勢いでは確認ができなくて、後日、一周考えて、改めて代表の方に、「田口八重子っていうのを初めて知ったんだけど、これどういう女性なんだ」というところをお伺いしました。

その時、代表は最初、なかなか口ごもった形で、はっきりと話をしてくれなかったんですけども、徐々に徐々に話をしてくれました。

まずですね、戸籍謄本を見たとおりに、「お前は、私の実子、実の子ではない」と、代表には多くの兄弟がいるんですけども、「兄弟の中の一番下の妹である八重子の子どもであるんだ」ということを言ってくれました。

なぜ、じゃあ、そしたら八重子さんがいなくなったのか、なぜ私とその代表の家に引き取られたのかというところを聞こうとしたんですけども、そのときには、またさらに口ごもってしまってますね、なかなか、はっきりとは言ってくれなかったんですけども、その内容に関しても、徐々に徐々にポツリとお話をいただきました。

先ほどのビデオの中にもありましたとおりに、大韓航空機爆破事件というのが1987年11月29日に発生しておりました。

これはですね、当時韓国という国はですね、韓国に住んで、出稼ぎの労働者というのがすごく多くてですね、中国やヨーロッパ中東に対して、多くの労働者を派遣していたんですけども、イラクからアブダビを経由して、それからソウルに帰る飛行機が、突如爆破が起きて115名という、乗客・乗員含めて115名という、尊い命が亡くなったという事件でございます。

この事件においてですね、アブダビの国際空港経由した形になるんですけども、そこで降りた不審な日本人2人が、バーレーンで発見されました。それがこちらの写真にある蜂谷真由美と蜂谷真一という、2人の日本人と思われる男女でございます。

当時ですね、バーレーン警察がこの2人に関して空港で不審に思い、2人の拘束を試みたんですけども、2人ともですね、服毒自殺を試みます。具体的には、紙たばこのフィルターの部分に、アンプルに毒を仕込んでおいて、何かあったときにはそこをガリッと噛んで、そのまま青酸カリかなにか、色々な薬があるかと思うんですけど、青酸カリかなにかを服毒をして、そのまま亡くなるというような、仕掛けを常に持っていたんですけども。ただですね、この2人とも服毒自殺を試みたわけなんですけど、男性の方の真一の方は死亡したのですが、蜂谷真由美の方は生き残ってしまったということがございます。

そのあとですね、実際、彼女は、バーレーン警察や、もちろん日本のパスポートを持っていますので、日本の警察及び韓国の警察というところで、各警察から尋問をされるわけなんです。ただですね、彼女が日本人ではないことは明確だったので、韓国にまず移送されて、韓国の警察から尋問を受けて、その途中途中で、日本の警察も関わって彼女にヒアリングを色々してきたわけなんです。その過程でですね、韓国人でもないし中国人でもないということが判明しました。

当時、韓国にも脱北者というのがすごく多くてですね、同じ朝鮮語を喋っているんですけどちょっとイントネーションが違ったりだとか、やっぱり文化背景とか経済背景が違うので、実際、韓国のソウルみたいにすごくきらびやかな世界というのは、北朝鮮の脱北者っていうのは全然知らないわけですね。

そんな脱北者の方々は、やっぱりその南というのがこんなに経済的に発展しているんだというのを、初めて国外に出たときに驚愕を受けるんですけども、彼女もその1人だったわけです。夜のソウルの町並みを見せて、すごくきらびやかですごく発展している韓国ソウルの状況を見て、彼女は「北朝鮮が言っていたことは全然違う」「北朝鮮で教えられたものは一切違う」というところで、そこで彼女は観念をして、私は北朝鮮の工作員である金賢姫（キム・ヒョンヒ）であるということ、自白するわけです。

彼女はですね、それ以降はとつとつと、北朝鮮の内情というのを話すことになります。実際、彼女がそもそも大韓航空機爆破事件を起こしたのはなぜかという、1988年のソウルオリンピックに対する妨害工作の一環であるというふうに言っています。要するに、日本人として偽装する、日本人が起こした犯罪として偽装することによって、世界平和というか世界の状況を不安定にする、ということが目的であります。

またですね、彼女は当然北朝鮮人であるし、その北朝鮮人が日本人を装う・繕うというところで、色んな日本語でしたりとか、日本の文化背景でしたりというところを知らなければいけない、その教育を受けなければいけないというところで、教育係だったのが、李恩恵（リ・ウネ）といわれる女性になります。

彼女はですね、その後の日本の警察当局等の尋問によって、日本の当局は、その当時失踪者の方々の写真というのを、例えば5枚ずつ見せて、この中にその先生はいるのかどうかというのを彼女に問い合わせていたんですけども、その時に、私の母である、こちらの写真の真ん中にある田口八重子の写真を見て、「李恩恵先生」というふうに彼女は発言したわけです。

このときに初めて、田口八重子さんと李恩恵とが繋がり、その李恩恵が北朝鮮に、教育係として北朝鮮にいたということになりますので、私の母親が1978年に失踪してから約10年近く経って初めて、彼女の所在というのが分かるわけです。

実際ですね、代表の方が八重子さんが失踪した後、1歳の私を引き取り、そして、2歳の姉は他の親戚に取られたわけですけども、その八重子が当時失踪したときに、八重子はなぜいなくなったのかというのとは分からないわけですし、いつか何となく帰ってくるんだろうと思って、そのために彼女にいつでも返せるようにと、私を一生懸命育てていたわけですね。

ですが、先ほどの大韓航空機爆破事件で、李恩恵イコール田口八重子ということが判明してしまってますね、ものすごく単純にいうと、メディア・スクラムでしたりとか、近所の方々の嫌がらせだったりとかいうところをくろうわけです。

今では、かなり多くのものが明るみになっているので、我々の八重子さんや代表を肯定的に見ていただけるんですけども、当時ですと、なぜ・どういう経緯かわからないと

というのが余計にありましたので、「なぜその北朝鮮の工作員スパイの教育係をしているんだ」とか、「お前はその国家犯罪に加担している家族のメンバーの人が1人なんだろう」というところを、事あるごとにメディアで叩かれたりとか、近所の方々、近所というか悪意のある方々に、叩かれたりとかっていうところで、家族を守るというところもあるし、あとやっぱり、父が一番言っていたのは、「耕一郎にこの事実を知られちゃいけない」というところで、必死に、家族とそういう悪意がある人々を離すというところで尽力していたというか、頑張れたというふうに、後々聞きました。

その状況が一時期続いたんですけども、それ以降は八重子さんの実態というか、情報が何も出てこないわけですね。それがずっと続いてですね、そこから15年ですね、八重子さんが北朝鮮にいるかもしれないという状態が続いていて、どうなっているんだというところをずっと悩んでいたわけです。

そんな状況が2002年9月11日に電撃的に変わることになります。

皆様もご記憶にあるかと思うんですけども、小泉元首相が電撃的に訪朝して金正日総書記と会談をしました。ここで初めて5名生存、そして12人未入境、死亡（8名死亡、4名未入国）という数字を改めて言われるわけです。

このときに、飯塚代表は、元々この会談の中で、八重子さんの名前が上がるとは思っていなかったわけですよ。ですが、いきなり家の、実家の電話に、外務省から電話がかかってきて、飯倉公館に来てくださいと、都内の飯倉公館というところに来てください、妹さんに関してのお話をさせていただきます、というところを言われたらしいです。

実際ですね、八重子さんに関しては、死亡しているってということだけを伝えられて、その明確な証拠がその時には出なかったわけです。すいません、明確な証拠はそのタイミングで出てこなくてですね、その後で、死亡確認書といわれるものが出てきたわけです。

当然、この死亡確認書だけで、田口八重子が死亡したかどうかというところを、我々は信じられるわけでもないわけですし、もっと明確な根拠というのは何か、というところを我々は突き詰めたわけです。

今、私は「我々」という言い方をしたのですが、ただですね、この2002年9月当時、私は海外の方で勤務をしております、朝、いつもインターネットニュースで拉致問題も含んだ日本のニュースをチェックした上で仕事に行くんですけども、いまだに覚えているのが、インターネットのニュース上で、【田口八重子 死亡】という一文だけが書かれている状況で、もうそれ以外の情報がなかったわけです。

その時に、もうすぐさま実家に電話して、「今どういう状況になっているんだ」と、そして、「もし本当に北朝鮮で死亡しているんだしたら、向こうに行ってちょっと墓参

りなり、何なりっていうのをちょっといろいろ考えたい」と飯塚代表に言ったんですけども、まだその時は、飯倉公館に行く前でもありましたので、ちょっと状況がわからないから、飯塚代表の方から「外務省も含めて、状況を聞いてくるから待ってろ」というふうに言われたわけです。

そのあとですと、育ての母親の栄子さんが、電話越しに泣いている声が聞こえるわけですね。

代表からその時に、「ちょっと母ちゃんと電話代わって一声かけてあげてくれない？」というふうに言われたんですけども、「ちょっと絶対嫌だ。そんな母親の泣き声なんか聞きたくない」と言ったんですけども、「安心させるために代わってあげてよ」と言われて、育ての母親である栄子さんに代わった時に、栄子さんはもうずっと私を育てて、八重子さんがいつでも帰ってきたときに、立派に育ったよっていうので返したかったという気持ちがすごく強かったんで、それが「叶わない」と思ったんでしょうね、「耕ちゃん、ニュースを見た？」と、「うん、もう見たよ」と答えると、「そういうことだから、ごめんね」と言って、大泣きで泣き崩れてしまって、もう全然会話ができなかったわけです。

その電話を切ったときに、私の産みの母親である八重子さんと、育ての母親である栄子さんという2人の母親を、何で、こんな国に苦しめられなきゃいけないんだっていうところで、私は本当にその時、もう人生の中でありえないんじゃないかっていうぐらいに、涙を流したことを覚えております。

またですね、先ほども申しましたとおり、2002年9月の北朝鮮の報告というのが十分なものではないというところで、専門家も含めていくつかの指摘を北朝鮮側に打ち返しました。

その結果新たに出てきたのが、2004年11月に、北朝鮮が新たな報告書として、田口八重子さんの事故報告書というのを出してくるわけです。またですね、田口八重子さんのこと以外に関して言えば、松木薫さんと横田めぐみさんに関しても、遺骨を提供してきたわけです。

いずれにしても、先ほどのVTRやアニメの中でもありましたとおり、遺骨自体もDNA自体が違うわけですし、いずれにせよ、その稚拙なその証拠を見せることによって、早期の日朝国交正常化を図ろうとしていた節があると考えられるのではないかと、いうふうに思っています。

北朝鮮からの報告に関して、「なぜそのまま信じないのか」「いや、彼らが出してきたんだから信じればいいのか」というふうな当時言われた方もいらっしゃるんですけども、本日の白いパンフレットにも、こちらの報告書の中身の部分については載っ

ているんですけども、これはまずですね、皆さんもご確認いただけるとおり、左下の影の陰影がですね、全部同じなわけですよ。

それも含めてですね、日本側から指摘したところですね、北朝鮮は 2004 年時点のタイミング、この証拠が提示されたのは 2002 年 9 月なんですけども、2004 年に追加の報告書を投げる時にですね、この報告書自体は急ごしらえで作った嘘の死亡報告書だったっていうのを、北朝鮮自身が認めているわけです。

またですね、2004 年に北朝鮮が田口八重子さんの死亡の根拠として提示したこちらの事故報告書なんですけども、衝撃的なことがですね、李恩恵でしたりとか、田口八重子っていう名前が、基本的に一切ない報告書になっています。

報告書の内容自体はですね、元山（ウォンサン）の馬息（マシク）嶺という北朝鮮の本当に何も無いようなところの、山道のところで、旦那さんが死亡した後で、気分転換に八重子さんをドライブに教官が連れて行って、その教官が運転している車と軍部の車が正面衝突をしてしまい、そして八重子さんの車が谷底に落ちて、その運転手もろとも死んでしまったという報告書なんですけども、その報告書の中にも名前がないわけです。

またですね、後日、帰国された 5 名の方に聞いたんですけども、元山（ウォンサン）の馬息（マシク）嶺自体も、そもそも北朝鮮というのは車も多く走ってない状況ですし、田舎の地域で、わざわざすれ違う、車同士がぶつかるほどの密度があるわけじゃない、あんなところで事故が起きるっていうのはちょっと考えにくいというコメントもいただいております。

そして、また先ほどの、横田めぐみさんや松木薫さんのように、DNA が違うという遺骨があったりとかというところで、本当に北朝鮮が出してきた報告というのは、でたらめに尽きるというようなものでございます。

北朝鮮はですね、その後 2004 年以降、拉致問題に関して公式的な見解というのを出してないわけです。いくつかの担当者が、継続的に 2004 年以降に言っているのは、「拉致問題は解決済みである」と、「もう証拠はすべて提示したし、これ以上は本当はないし、日本は相変わらず死亡した人間を生き返らせるという無理な対応を言っている」というところで、一切取りつく島がないというのが現状になっています。

またですね、外務省を中心に、少しでもこの拉致問題を進めたい、進めようとして考えている方々がいらっしゃって、ストックホルム合意というのを北朝鮮との間で取りつける形になりました。

これはですね、結局、拉致問題を含めた諸問題を、同時かつ包括的に並行的に協議していく、北朝鮮と日本で協議していくという話になっています。拉致問題以外に関しては、例えば日本人の遺骨、向こうに戦時中に残ってしまった遺骨の問題でしたりとか、

あと帰国事業によって北朝鮮に連れて行かれてしまった日本人妻の方々の話でしたりとかっていうところを、諸問題というふうに言っているわけです。

その諸問題に関して再調査をするために、特別調査委員会を立ち上げて、その報告を出すよというふうに、北朝鮮と日本の外務省というのは、約束をした形になります。

ただですね、この調査委員会に関しては、いきなり何の報告もなく 2016 年 2 月にですね、調査を全面的に中止して、解体をするというふうに北朝鮮が言ってきたわけです。結局、我々は新しいレポートも何ももらえてないわけですし、当然出てくるわけがないんですけども、そういうふうに、日本に対しては何かをやっているという形の、体のいい形で、日本に対して体面を取り繕うというところを、ずっと北朝鮮が続けているという形になります。

また、下段に書かせていただいているんですけども、2015 年以降ですね、連絡事務所を設置して、日本と北朝鮮の連携を密にすればいいんじゃないかというところが、事あるごとに話として上がってくるわけです。これに関して、私どもの見解を言いますけれども、基本的には求めてないわけですし、「こんなものは断固拒否する」ということを申し上げているわけです。

これらが、認定されている被害者の家族、田口八重子さんを含めた認定されている被害者の家族を中心にした状況なんですけども、それ以外でですね、北朝鮮に拉致された疑いが濃厚であるという方が 879 人、2 年前のデータですけども、というのを警視庁が上げているという状態になっています。認定の家族以外でもいるんじゃないかというところが、国内の報告として上がっているわけです。

またですね、北朝鮮における拉致被害者というのは、日本人だけにとどまらないわけですね。私も何度か国連にお伺いさせていただいて、人権委員会等で話をさせていただきましたけれども、その一端の中で、その C O I という「北朝鮮における人権に関する国連調査委員会」というのがございまして、ヨーロッパや国連を中心にしたヨーロッパの方々でしたりとか、アメリカの方々というのは、当然その人権問題というのは、すごく熱意を持ってやられているんですけども、そこで上げた報告書の中でですね、マレーシア、シンガポール、フランス、イタリア、オランダ、中国といった諸国にも、拉致被害者が存在するということが報告されているわけです。

またですね、2002 年に 5 名の方々が帰国されましたけども、その方々がおっしゃっている中でもですね、発言・証言の中で私も直接聞いたんですけども、北朝鮮の中には敵工地と言われる場所があると。そこは、世界から拉致した人々をそこに集めて 1 ヶ所で生活をさせるというところなんですけども、そこの中では、韓国人でしたりとか日本人でしたりとか、白人、どこの国の方っていうのは言われなかったですけども、白人の方でしたりっていうところで、もういくつかの国の方々が、拉致されてそのまま管理さ

れている状況であるっていうのを、直接、私も聞きました。また、その中でですね、具体的に韓国、タイ、ルーマニアという国で、日本以外でも拉致をされているところを、明確に証言されているわけです。

またですね、直近では、これは普通の拉致事案とは若干異なるところではあるんですけども、やはり北朝鮮による拉致被害者として避けて通れないというところは、オットー・ワームビアさんの件です。

オットー・ワームビアさんは大学生で、大学の卒業旅行として中国や北朝鮮に旅行に行ったわけですけども、北朝鮮のホテルに泊まったときに、つい出来心だとは思んですけども、ホテルの備品をちょっと盗もうとしてしまった。それによって、そのまま北朝鮮にその拘束をされるわけですね。

北朝鮮でですね、基本的に人権無視の尋問、拷問ですよ、拷問されるわけです。それで、拷問を何ヶ月もされ続けて、そのまま意識も戻らない状態で、生死をさまよっている状況で、北朝鮮が急遽アメリカの政府関係者に打診して、そのまま心臓だけが動いている状況で帰ってこられたんですけども、帰国後、数週間ののちに亡くなってしまったという事案です。

当然ですね、オットーさんのご両親のシンディとフレッドがその右側に出ていますけども、この2人はとんでもない怒りをもって、かつそのアメリカの政府関係者とも話をした上で、アメリカでテロ支援国家に再指定したりとか、この2人がアメリカの国内の裁判によって数十億ドルというところの賠償請求を金正恩にしたりっていうところで、彼らも彼らで、北朝鮮に対して、許さないぞという活動を続けているという状況になっています。

そもそも北朝鮮が何のために、日本人やヨーロッパの方々等を拉致するのかっていうところを、改めて、おさらいさせていただきたいんですけども、私が認識している限り、2点ございまして、1点目はですね、工作人員を育成するためというところがございます。

拉致問題に関しては、今から三、四十年前が一番ピークで拉致事案が多いんですけども、その三、四十年前というところはですね、北朝鮮もだいぶ潤っている状況で、その対南工作、つまり韓国に対するスパイ活動の一環として、当初はですね、外国人を、日本人を含めた外国人を拉致して、洗脳教育をして、北朝鮮が思うがままのスパイ要員として育成をして、韓国に送り込むっていうのをすごくやりたくて、日本人も何人か拉致したというところがございます。

ただですね、北朝鮮の思想洗脳教育に関しては、やっぱり十分じゃなくてですね、途中から、その拉致をした人間をスパイ化するんじゃなくて、拉致した人間を教育係にして北朝鮮の工作人員を教育しようという形に、方針を転換したというふうに聞いています。その一例が先ほど上がった、金賢姫の話になるかと思います。



2点目がですね、「自国の生産性の向上？」というふうに書かれているんですけども、北朝鮮という国に関してはやっぱり技術的なレベルというのが全然高くないわけですね。その中でですね、1990年代などは、例えば、覚せい剤が、北朝鮮産の覚せい剤が蔓延したりとかですね、あと偽札、スーパーKと言われる偽札が蔓延したりというところがございまして、それらを下支えしていたのが、例えば日本から行った印刷工じゃないかとかというところは、いくつか言われているみたいでございまして。

またですね、「正直なところ、もう拉致被害者って生きていないんでしょう」「何でそんな昔の話をずっと君たちは言い続けているの」という、正直に言って私としても信じられないような発言をされる方っていうのは、永田町界限には実はいらっしゃいます。

ただ、我々は単純に、やみくもに、生存を訴えているわけではありません。大きな理由として、2点ございます。

1点目は北朝鮮からの信用に値しない報告でございまして。客観的に死亡として確認できるものがなければ、当然我々は生きていう前提に基づいて活動するわけです。救出するための活動を続けるわけです。

また、2点目に関してですけれども、八重子さんに限ってですけれども、八重子さん自体は1986年6月の下旬に、先ほどの交通事故で亡くなったというふうに報告されるわけですけども、7月以降にですね、目撃情報というのがあるわけですよ。それが一つではなくて、多数あるわけです。例えばですね、1986年10月に平壤の外貨ショップ、外貨ショップというのはデパートみたいなところで、北朝鮮の製品以外を取り扱うようなデパートなんですけども、そこで八重子さんを見たというふうに言っている運転手がいたりですか、金正日の軍事大学で八重子さんを目撃したというスタッフがいたりするわけですね。

そして、最も新しいのは、2014年とか2016年に、坐骨神経痛を元々持っていて、それが悪化して2014年、2016年に手術をした。2014年に、坐骨神経痛の手術をやったりとかですね。2016年に関しては、それ以外に生死をさまよう手術をしたっていうところの報告が上がったりというところで。公式なものではないにせよ、彼女の生存情報というのは、いくつか私は聞いているわけです。

我々が、具体的にどういうことをやっているのかというところに関してですけれども、救出のために本日のように国内での講演でしたりとか、署名活動というのを、日本各地で行わせていただいております。

当然、私の地元、埼玉の方だけではなくてですね、例えば九州においては、熊本の方でも、斉藤文代さんという、松木薫さんのお姉さんですけども、ずっと署名活動をされたりとかですね、鹿児島市の市川さんたちも定期的にやられたりというところで、本当に可能な範囲で、できる限りの範囲で、ボランティアの方々に協力をいただいて、署名活

動でしたりとか講演活動をさせていただいております。

またですね、日本政府に対しての答申や嘆願、直接的に答申や嘆願というのをさせていただいております。先日も、岸田内閣が発足した後で、結構早い段階で、直接お話をさせていただく機会を得ました。その時にも、改めて全員の即時一括帰国のために、具体的な行動に進んでくださいというところを、申し上げた次第でございます。

またですね、それ以外に関しては、世界的な観点から、国際活動というところで、国連で日本政府主催のシンポジウム等を開催いただけるので、そこに参加させていただいて、毎年、ほぼ毎年ですけど、お話をさせていただいたりというところで、国連関係者だけではなく、海外の方々にもお話をさせていただいて、この問題を解決しなければいけないというところを訴えさせていただいているわけです。

先日、24 日にもデンマークの大使館の方にお伺いして、デンマークの外務大臣に、我々の境遇も踏まえてお話をさせていただいて、同調していただきました。デンマークとしても、有本恵子さんが日本赤軍に拉致されてそのまま北朝鮮に向かったのが、デンマークのコペンハーゲンなんですけども、有本恵子さんの事案もありますので、デンマークとしてもできる限り協力をしていきたいという言葉も頂戴しております。

またですね、いまデンマークの話が出ましたけども、それ以外にもですね、トランプ大統領ともかつてお話をさせていただいて、「拉致問題を解決したいんだ」というところを直接申し上げたりとかですね、バイデン政権においても、先日もシャーマン国務副長官とお会いして、我々は核、ミサイル問題と拉致問題を切り離して、拉致問題を進めたいというところをお話させていただいております。そういう意味で、アメリカ政府の有力者も含め、我々の願いを直接お話をさせていただいている状況になります。

一方、北朝鮮に対してはどんな形になっているかというところでございますが、特にですね、先ほどのトランプさんに直接、直訴したところが大きかったわけなんですけれども、実際、米朝首脳会談というのが過去3回行われているわけで、この時にですね、トランプ大統領から金正恩に対して、「日本は拉致問題を諦めてない」「そこを解決しないと何にもならないぞ」というところを直接、言っていたというものが、過去ございます。

またですね、菅内閣から岸田内閣に代わりまして、トランプさんもバイデン政権に代わったというところで、ちょっと交渉自体がリセットをしている状況になっています。ただですね、北朝鮮自身も、先ほどのビデオメッセージにもあったとおり、経済制裁、国連における経済制裁でしたりとか、一昨年台風被害、またその新型コロナで経済的な交流ができないというところで、大分経済的に枯渇をしている状況になっています。相当苦しいわけです。それで、その相当苦しい状況を打破するために、北朝鮮は拉致被害者を返す、そして北朝鮮自身が経済的な交流も含めて明るい未来を描くべきだということを、我々は申し上げている次第でございます。

そしてですね、また私が申し上げたいのは、やはり私が1歳のときに田口八重子さんは拉致をされて43年経っているわけです。私が1歳のとき、八重子さんが22歳で、今は66歳という月日で、余りにも長い状況が続いています。この長い状況の中でですね、先ほどのアニメ「めぐみ」でも出た、横田滋さんはもう亡くなってしまっているわけです。

滋さんとはですね、各講演で一緒させていただいて、そんなに多いわけではないんですけども、各地方の講演とかも、早紀江さん、滋さんと私とで、お話をさせていただいて、いつも2人とも「耕ちゃん、大変だけど頑張ろうね」というのを言ってくれたわけです。

その滋さんが亡くなられてですね、私はその、これだけ滋さん、いつもにこにこしていた滋さんが、めぐみさんと会えないということを考えると、本当にちょっと余りにも辛くてですね、何かもう、亡くなったときには、本当に2日、3日、放心するくらいの状況でございました。

またですね、有本嘉代子さん、先ほどのコペンハーゲンのお話をさせていただいた有本恵子さんのお母様である嘉代子さんも、去年の2月に亡くなられているわけです。嘉代子さんも本当に90歳を過ぎるまで、集会でしたりとか、日本政府への答申というところで、すごく頑張っていたいただいて、無茶をしていただいたにもかかわらず、結局、恵子さんと会えないままで、他界されてしまったというところで、悔しい思いであります。

日本で帰国を待っている家族もポツリ、ポツリと亡くなっているわけですが、一方、北朝鮮で、我々の救出を待っているところでも、本当に頑張って生存できているのかというところが、すごく心配な状況でございます。

だいぶ終盤にかかってきたんですけども、まず皆様にご理解いただきたいところがございます。

今、岸田内閣においても拉致問題解決を、「最重要」というふうに掲げていただいていますけれども、ちょっとなぜか最近、「最優先」という言葉を使っただけでないんですけども、「最重要」というのは本当に譲れないわけです。先ほども申したとおり、本当に時間がない、我々家族にとって時間がないというわけです。

当会の代表である飯塚繁雄に関しても、先日11月13日の集会で久々に出てきたわけですが、その週あたりは体調が良かったんですが、ちょっとまた直近、だいぶですね体調が悪くなってしまってますね、いささか心配な部分ではあります。早く元気なうちに会わせないといけないなと思っていますし、仮にですね、めぐみさんが帰ってきたり、八重子さんが帰ってきても、我々、こっちで待っている家族が、本当に笑顔で抱き合えるような状況でないと、本当に真の解決ではないというふうに思っています。

先ほどのワームビアさんのお話ではないですけど、瀕死の状態で、もう意識がない状

態で会ったとしても、我々は素直に喜べないという形になってしまうわけでございます。

北朝鮮は、拉致被害者や拉致被害者家族がそのまま死ねば、もうこのままストーリーとして終わるだろうと考えている可能性がとても高いというふうに思っています。

ですが、我々家族会としては、私が一番、最若年ですけれども、最後の一人になっても、被害者の帰国が叶わなければ、北朝鮮に対して断じて許すことはないですし、国交正常化や北朝鮮との経済交流というのを許したいとは思っていないわけでございます。

またですね、我々家族はですね、被害者の帰国以外は求めていません。ここ2、3年ずっと言い続けております。すべての被害者を早期に一括で帰国させていただきたいというふうに言っております。

2002年に、一部の被害者だけが帰ってきました。「すべての被害者」というフレーズを使わないと、何人か帰ってきただけで、あとは知らないという形になってしまいます。その結果、また20年経ってしまう可能性があるわけですよ。もうこれ以上、先ほども言っているとおり、時間をかけていいというわけではないので、「すべての被害者」というフレーズは、必ず外したくないわけです。

また、一括で返さないと、また小出しにされてしまって、我々、被害者の家族がまたポツリポツリ亡くなっていくのかという話にもなると思います。そんなことは求めていなくて、「すべての拉致被害者の即時一括帰国」というところは、大義名分として絶対外せない、というところをご理解いただけるのかなと思っています。

またですね、2点目の連絡事務所でしたり、合同調査を先ほどのストックホルム合意のところで言わせていただいたんですけども、このようなものも求めておりません。

例えば、選挙でしたりとか、北朝鮮とのやりとりが動くタイミングでも、これだけ19年もの間にも進展してないのだから、連絡事務所や合同調査をすることによって、ちょっとでもいいから進めていけばいいじゃないかっていうご意見をいただくことがあるんですけども、そのようなものというのは基本的にいらないわけですよ。

なぜかという、5名の方々が帰られたときに、いろいろヒアリングをさせていただきました。「我々の家族は、向こうでどういう状況なんですか」というところをお伺いすると、向こうには「招待所」というところがあって、その招待所は、大体その6棟とか7棟、一戸建みたいなのが建っている状況で、それぞれの棟に約2名ずつぐらい拉致被害者が置かれていると。

そこの家の中で賄い婦、もともと軍人の奥様でかつ軍人の方が亡くなったようなケースの一人身になってしまった奥様とかを賄い婦として置いておく。賄い婦という聞こえがいいんですけども、実は監視役なわけですよ。そこの招待所に週1回教官が来て、今週一週間、何をやってたかというのを、ずっと聞いているわけですよ。そのよう

に、ある意味軟禁をされている状況なわけですね。

この状況にもかかわらず北朝鮮は連絡事務所を作りましょうとか、合同調査をやって、どこにいるかわかんないから、一から調べましょうということを言うわけです。完全な監視下に置いているにも関わらず、また連絡事務所設置や合同調査をやりましょうっていうのは、時間稼ぎ以外の何ものでもないということを、ご理解いただければなと思っております。

またですね、北朝鮮から流れてくる情報の一部としてはですね、北朝鮮の内情が知れ渡るんじゃないかというところ。帰国させた場合、色々あれこれ喋ってしまって、北朝鮮の内情、特にキムファミリーの周りのことが流れるんじゃないかというところをすごく気にしているというところを、いくつかの話で伺っています。

ただ、我々は北朝鮮の内情を明かすようなことは一切ないですし、本当に40数年ぶりに日本に帰ってきて、静かに日本で暮らしていただきたいという気持ちだけでございます。

またですね、日本政府にはもう待ちの姿勢は、許されないとします。

先ほどのビデオメッセージ等でも、日本政府としても色々動いているということは書かれていましたが、本筋の、日本政府が北朝鮮に対して「この問題を解決したいんだ」「拉致被害者を救出したいんだ」というところを、直接投げかけるということは、正直あんまり私には見えてない、そういうことをやってるというふうには思っておりません。

あくまでも国内向けに、条件をつけずに金正恩委員長と会いたいというふうに言っているだけで、北朝鮮に対する投げかけが十分ではないというふうに思いますので、そこをまず、投げかけていただく、そして、具体的な首脳会談に入れるように進めていただくというところが、必要になってきます。

残念ながら、前々政権と前政権、安倍内閣及び菅内閣の時にも、期待させていただいたんですけども、7年8ヶ月、8年近く成果が出ていなかったわけです。2002年の5名の帰国以降、1人も帰ってこない状況で、政府は良くやっているねというふうに、我々は言えるわけがないんです。あくまでも、帰国者がいない限りは、政府がやってることは0点だというふうに、強く、強く言っていくべきだと考えています。

またですね、拉致問題というのは、北朝鮮における諸問題、核、ミサイル、拉致というところが日本が掲げている3つの問題なんですけども、拉致問題に本当に関わっているのって、日本だけなわけですね。拉致問題と核、ミサイルというところを切り離して、拉致問題だけを進められる状況を作るというのが、日本政府として必要なことだと思います。逆に言うと、核、ミサイル問題を永遠に北朝鮮は切り離さない・手放さないわけなので、そんなのを待っていても、命がなくなっていくだけなので、そこはやめて

いただきたいというふうに考えています。

日本としては、時間がかかり過ぎていて早く解決をしたい。一方、北朝鮮としては、先ほど申し上げた経済的な逼迫というのが考えられるので、それぞれがそれらの問題を解決するために、打開な策を見出して、お互いメリットを享受できるように、未来志向で考える、建設的なマインドで進めていくということが、今後必要になってきますし、そういう環境を作るということが必要になってくるわけです。

最後になりますけれども、皆様をお願いしたいことがございます。

本日の資料にも入っているブルーリボンなんですけれども、こういうのをつけていたりとか、先ほども言ったとおりに時々、署名活動をさせていただいていますので、署名の方をお願いできればなというふうに考えています。

またですね、拉致問題に関して、皆様の周りの方々にも改めてお話いただければなと思います。拉致問題について、先ほどの署名は1500万筆、今いただいている状況です。一般の活動としては、とんでもない数字ではあるんですけれども、ただやっぱりこの問題を知らない方というのがまだまだいらっしゃいますので、ちょっとでもいいから、話題にさせていただければなというふうに思います。

私も時々、大学等でお話をさせていただく機会というのがありますが、2002年の五名の方々が帰られたのが、もう19年前なので、大学生だとまだ生まれてないとかっていうケースがあったりするわけですね。こういうところで、本当に若い方って、実はこの問題を知らないってのがすごく多くて、是非ともその若い人、息子さん、娘さんやそのお孫さん等に、こういう問題があるんだよっていうことを、改めてちょっと教えていただけると大変ありがたいなというふうに考えています。

そして最後にですね、政府への叱咤激励というところで、メールでしたりとかFAXでしたりとか、直接お電話でも結構ですので、行っていただきたいと思います。

本当に、特にですね、政府がちょっとその弱腰になったりとか間違ったときに、日本政府は本当に拉致問題を解決する気があるのかというところを、そのままご連絡いただければ、彼らは仕事として記録を残さなきゃいけないわけですし、またそれを世論として、後ろ支えとして進めていきますので、皆様から、是非ともご連絡をいただければなというふうに思っています。

最後になりますが、本当にですね、私の母が拉致をされたとき、私が1歳というところで、いまだにこのような講演等でも、「母」という言い方に、なかなかすごく違和感があってですね、いつも「八重子さん」「八重子さん」という言い方になってしまいます。

本来ですと、うそでもいいから「母親助けるために」というふうに言うべきなんですし

ようけれども、なかなかそれって難しいなと思うし、どうしても母親という切り口で彼女に近づけないというのが、本当にずっと続いている状況なわけです。

ですので、母が生きているうちに日本に帰ってきて、母というか八重子さんが生きているうちに日本に帰ってきてもらって、直接、私の声で、「お母さん」ということを伝えたいと思いますし、また、早紀江さんに関しても「めぐみちゃん」というふうに伝えてあげたいだろうし、めぐみさん自身も「お母さん」というふうに、言葉を、世界中にありふれている言葉かもしれないけど、それをそのまま素直に伝える、という状況を作りたいというふうに考えています。

そのために、是非とも皆様のご理解や、皆様の活動、動きというのが必要になってきます。ぜひとも、引き続き、この問題長いですが、ご理解をいただいた上で、ご協力いただければなと思っております。

本日は長時間にわたり、お聞きいただきまして誠にありがとうございます。

私からのお話は以上でございます。ありがとうございました。

※講演内容について、できるだけ忠実に作成しております。